

サッカーの動きの言語化とプレイの判断能力の関係性に関する考察

小松 翔 (埼玉大学)

1. 目的

本研究の目的は、サッカープレイヤーのプレイ中の自身の動きの言語化能力について佐野 (2012) が示したコツの言語表現の分類により検討し、プレイの判断能力との関係性を明らかにすることと、サッカープレイヤーの運動感覚の言語化の傾向を分析し特徴を明らかにすることである。

2. 研究方法

対象者による試技と試技後のインタビュー調査

1) 対象者 : S 大学サッカー部 9 名

2) 試技内容

I. シュートのスキルテスト

II. パスのスキルテスト

III. 叩きつけるボレーのスキルテスト

3) 分析方法 : 試技後のインタビュー調査と S 大学サッカー部 (J F A 公認 S 級コーチ) による対象者の判断能力に関する評価 (1 から 5 の 5 段階) の関連性を言語表現 (コツ的な表現の数) と言及内容の 2 点から分析する。

3. 結果と考察

1) 言語表現による分類結果と考察

対象者が実際に話した言葉を、佐野 (2012) が定義した 5 種類のコツ的表現と、筆者が設定した 4 種類のコツ以外の表現の計 9 種類に分類し、考察した。言語表現での分類による分析では、パスのスキルテスト時のコツ的表現が多いほど判断能力が低く、ボレーのスキルテスト時のコツ的表現が多いほど判断能力が高いということが示唆された。パスのスキルテストは日常的な練習でもよく見られると考えられる設定であり、サッカーの試合中にも類似した状況が多く見られる。そのため、判断能力の高い対象者はプレイ中の動感意識まであがらず、他に意識をむけることができたのではないかと考えられる。ボレーのスキルテストは下

にボールを叩きつけるという、サッカーの試合中ではあまり多くは見られないと考えられる課題のため、普段行うことが少ないと考えられる動きを行う場合、その動きの遂行のためにそのプレイヤーが蓄えてきた経験や、身体知が意識のレベルまで上がってきたことが考えられる。

2) 言及内容による結果と考察

対象者が話した内容を筆者の主観で分析を行なった。対象者の発言を内容から分析した結果からは判断能力が 5 と評価されるプレイヤーには以下の傾向が見られることがわかった。

① 抽象的な言葉が少ない。

② 自身の試技に対するイメージ→実際の動きの内容の順で言及している。

③ 1 回目の試技と 2 回目の試技が関連付けられた言及がある。

①について、判断能力と抽象的表現数の間には負の相関関係 ($r=0.51$) があり、判断能力が高いほど抽象的表現が少ないことが示唆された。

4. 結論

本研究より、サッカーのプレイ中の自身の動きに対する言語化能力とプレイの判断能力との関係性について、抽象的な言葉が少なく、プレイとプレイを関連付けて発言することができるプレイヤーは判断能力が高いと示唆された。また、判断能力の高いサッカープレイヤーの言語化の傾向として、自動化されていると考えられる動きに対してはコツ的表現が意識下に沈み、自動化されていないと考えられる動きに対してコツ的表現が現れることが示唆された。

5. 主な参考文献

- 1) 佐野淳 (2012): コツの言語表現の構造に関する発生運動学的研究
- 2) 金子明友 (2002): わざの伝承. 明和出版